

地理読本『ニルスの不思議な旅』の成り立ち

村山 朝子*

(2010年11月30日受理)

The Birth of “The Wonderful Adventure of Nils” as Geographical Textbook

Tomoko MURAYAMA

(Received November 30, 2010)

I. はじめに

児童文学『ニルスの不思議な旅』（原題：『ニルス・ホルゲションの不思議なスウェーデン旅行』（以下『ニルス』と略す）(Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige)）は、スウェーデンの女流作家セルマ・ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858～1940）の作品である。一般に、魔法で小さくされた少年ニルスがガチョウに乗ってガンの群れとともにスウェーデンを旅しながら成長していく冒険物語として知られる。しかし、そもそも同作品は、スウェーデンの新たな国土像形成と郷土愛、祖国愛の涵養を主目的とする学校用読本（läsebok）¹⁾として著されたものである。2巻からなり、第1巻は1906年、第2巻は1907年に刊行された（図1）。



a. 第1巻（1906） b. 第2巻（1907）

図1 『ニルスの不思議な旅』初版表紙

*茨城大学教育学部社会科教育研究室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1）；Laboratory of Science Studies, College of Education, Ibaraki University, Mito, 310-8512 Japan

表1 ラーゲルレーヴ・『ニルスの不思議な旅』関連年表（筆者作成）

セルマ・ラーゲルレーヴ	国民学校読本に関わる動き
1858.11.20 ヴェルムランド・モールバック生	1842 初等民衆教育令 国民学校設置
	1868 最初の『国民学校読本』発行
	1876 改訂『国民学校読本』
	1880 スウェーデン国民学校教員協会 創設
	1881 スウェーデン教員新聞 発刊
1882 ストックホルム女子高等師範学校入学	1883 F.ペレイ 『基礎学校として小学校』
1885 ランスクローナ女学校就職	1884 E.ケイ 『本と教科書』（『児童の世紀』掲載）
	1884 スウェーデン観光協会 創設
1890 『イエスタ・ベルリング物語』 懸賞小説	1890 再改訂『国民学校読本』
	1890 『スウェーデン観光協会年報』 発刊
1895 教職を辞し，フェアレン移住	
1997 『反キリストの奇跡』	1897 F.ペレイ 『国民学校地理教科書』
1899 『地主の家の物語』	1898 E.ケイ 「愛国主義と読本」
	1900 E.ケイ 『児童の世紀』
1901 『イエエルサレム』 第一部	1901.1 読本作成委員会設置
	1901 秋 ラーゲルレーヴに読本作成への協力を打診
	1902.1 ラーゲルレーヴと委員会との読本に関する覚え書き締結
1902 『イエエルサレム』 第二部	1902.7 委員会から会員に情報提供を依頼
	1902.11 委員会からラーゲルレーヴへ文献リスト送付
1903 夏 南部調査旅行	この間ラーゲルレーヴと委員会との間で読本作成に関連して多数の書簡のやりとりが行われる。
1904 夏 北部調査旅行	
1904 『キリスト伝説集』	
	1906.12 『ニルス・ホルゲションの不思議なスウェーデン旅行』 1巻
	1907.12 『ニルス・ホルゲションの不思議なスウェーデン旅行』 2巻
1908 『沼の家の娘』	
1909 ノーベル文学賞受賞	
1910 故郷モールバック移住	
1914 スウェーデン・アカデミー会員選出 (以下略)	
*1918 『飛行一寸法師』 初邦訳	
*1932 『不思議な旅』 とともに香川鐵蔵	
1940.3.10 没（享年 81）	1918 V.オランダ 『ニルスの不思議な旅ハンドブック』

学校用読本はその後半世紀にわたって発行され続け、最後の版が1959年に出されるまでに累計発行部数は第1巻55万9千、第2巻は50万5千にのぼった(Nordlund 2005)。当初から一般図書としても書店で販売され、またたく間にスウェーデン中の家庭に広まり、さらには多数の言語に翻訳され²⁾、国内外で世代を超えて広く愛読され今日にいたる。

読本は「読方」の教科書であり、初等教育における中心教材の一つであった。「地理」は「歴史」と同様に初等教育の教科に位置づけられ、教科の教科書(lärobok)があった。したがって『ニルス』は「地理」の教科書として作成されたものではない。しかし刊行の目的に照らせば、地理教育の教材、地理読本ともいえる。同作品が百年の時を超えて国内外で読み継がれているとすれば、そこには地理教育の普遍的なあり方に示唆を与えるものがあるのではないだろうか。

筆者はすでに地理教育の観点から『ニルス』の内容分析を試みた(村山 2005)。それを踏まえ、『ニルス』の成立の経緯とその背景を明らかにすることが、本稿の目的である。

II 国民学校と読本

II-1 初等教育の普及とスウェーデン国民学校教員協会の創設

スウェーデンにおける庶民の子弟への初等教育の義務化は1842年の初等民衆教育令(公立国民学校法, stadga angående folkundervisningen i riket)に始まる(表1)。初等教育は6年制で、7歳からの2年間は幼児学校(småskola)、9歳からの4年間は一般に国民学校(folkskola)と呼ばれた。当初、国民学校から中等学校(läroverk)への接続は閉ざされ、庶民と上層階級との教育が分離された複線型の学校制度が取られた。

国民学校で使われる教科書のなかでも一番利用頻度が高かったのは読本であろう。国民学校読本は1868年に初めて作られた。収められた詩文の題材は多岐にわたり、国語力の育成とともに、近代国家形成にあたり、児童にあまねく国民としての知識や規範を身につけさせ、国民化することを目的とし、国民学校の教育の中心的役割を果たしたものとみられる。しかし、その内容は児童の発達段階や興味・関心などを配慮したものとはいえなかった。

1876年に改訂版として出された国民学校読本(Upplagan 1876)の章立は次のとおりである。

1. いろいろなお話(57)
2. 祖国の自然と地理(82)
3. 祖国の歴史と物語(45)
4. 外国の地理(43)
5. 世界の歴史と物語(17)
6. 発明・科学(14)
7. デンマークとノルウェー(9)

短い寓話や詩からなる1章から始まり、2章以降は地理や歴史、科学等を題材とする1から3ページからなる短編が括弧に示した数だけ収められていたが、前後のつながりもなく作者も異なる文章の寄せ集めだった。

1880年、国民学校における教育の向上を目的として、スウェーデン国民学校教員協会(Sveriges allmänna folkskolläraforening)が組織された。翌1881年に発刊されたスウェーデン教員新聞(Svensk Läraretidning)(以下教員新聞と略す)は、同協会の具体的な活動を知る手がかりとなる。新聞には研修会などの開催告知、支部や会員への連絡事項、支部の活動報告や国内外の学校や教育関係の最新ニュース、教育についての論説などが掲載され、誌上では教育についてのさまざまな論議が交わされた。また自然科学・地理・統計などの最新情報や教育関連書籍や教材なども紹介された。こうしたことから、協会が教育内容・方法の充実・改善を目指す教員の集まり、学会のような存在であっ

たことがうかがえる。協会は、教員新聞を通して、全国に広がる教員らに重要な情報発信し、また議論の場を提供するなどして、教育界に少なからぬ影響を与えていったとみられる。

協会の中核的役割を果たしたフリチュヴ・ベルイ（Fridtjuv Berg）は、複線型学校制度を改め初等学校を統合した基礎学校を設立することを目指した急進的 school 改革派で知られる。ベルイは小学校教員からのちに1891年には国会議員となり、1905年、1911年には文部大臣を務めた。後述するように、この間ベルイは自ら地理の教科書を執筆する一方、『ニルス』の誕生にも関わっている。

II-2 エレン・ケイによる国民学校読本批判

19世紀末から20世紀初頭にかけて、それまでの教師による教授中心の教育から児童中心の教育への転換の動きが欧米を中心に広く展開された。この動きは総じて新教育運動とよばれる。1900年にスウェーデンのエレン・ケイ（Ellen Key）が著した『児童の世紀』は、近代国家体制下の公教育を痛烈に批判し、子どもの発達や思考に合わせた学校教育の必要性を説いた。同書はとくに海外で反響を呼び、新教育運動のバイブルともいわれた。

ケイは、『児童の世紀』の第6章「本と教科書」³⁾で読本のありかたについて述べている。この論考の初出は、1884年に彼女が書いた最初の教育学論文である。

ケイは学校で使われている読本が「児童書や宗教教義や詩や自然科学や歴史からとった不安定な寄せ集めでできている」と記し、上述の国民学校読本を痛烈に批判したものと思われる。子どもは「抽象的なものに対して魅力を感じない。作り話は好きではなく」、「トムソーヤのような物語が子どもを引きつけるのは、それが成長するもの自身の物語であり、その内容が『生命と行動と驚嘆に溢れ、構想が幅広く無邪気』であることに起因する」として、童話や文学作品などの効用を強調している。読本は「生活と行動と奇想に満ちたものにし、意図を目立たないようにしなければならない」とも記している⁴⁾。

ケイの読本批判はその後も続いた。それが世間で論議を呼ぶのは、1898年『言葉と絵(Ord&bild)』誌に発表した論文「愛国主義と読本 (Patriotism och Läseböcker)」である。ここでは国民学校読本を名指しで徹底的に批判した。読本を芸術性が低く保守的で非教育的であると叩き、子どもの想像力や感覚を重視し、質のよい文学を原典から学ぶべきであると主張した。

このように、ケイは一貫して国民学校読本を批判し続けるとともに、それに代わる読本のあり方を提言してきたのである。

なお、ケイは地理教育については一定の評価をしている。『児童の世紀』第2章「未来の学校」において学校における硬直化した科目構成をくりかえし非難しているが、そのなかで主要科目として歴史と地理、自然科学、数学の4科目をあげ、それらの必要性を述べている。地理は「いろいろな方向に開かれた展望をもつとされる科目」であるとしている。

II-3 ラーゲルレーヴとエレン・ケイ

ラーゲルレーヴは、1858年スウェーデン中南部ヴェルムランド地方の農場主の家に生まれた。幼い頃から文学に親しみ創作を続けてきたが、ストックホルムの高等師範学校を卒業後、1885年から10年間、ランスクローナの女学校で地理や歴史を教えた。「教室での彼女の物語は生徒たちを魅了し」、授業ばかりでなく政治集会や平和運動、夜学と活発に活動するかたわら、創作に従事し

た⁵⁾。のちの婦人運動、世界平和運動といったラーゲルレーヴの幅広い活動の萌芽は、すでにこの時期にみられた。

1890年『イエスタ・ベルリング物語 (Gösta Berlings saga)』で文壇に登場し、1895年には教職を辞して作家に専念するようになる。幻想的なものと現実的なものを混じり合わせた独特の作風で、人間や生命を賛美し肯定する彼女の作品は広く世間に支持された。エジプト、パレスチナでの長期の調査旅行ののち著した大作『イエルサレム (Jerusalem)』(1巻1901, 2巻1902)で、国民作家としての地位を不動のものとした⁶⁾。

ラーゲルレーヴは、当代の著名人をはじめ多数の人々と書簡のやりとりをしている。その数1万7千人、総数4万通ともいわれる書簡は、現在ストックホルムにあるスウェーデン王立図書館が所蔵し、またその一部は複数の書簡集 (Toijer 1967・69 他) として出版されている。

書簡のなかにはラーゲルレーヴとエレン・ケイとの間で交わされたものもあり、ケイが発表した評論や随筆集等についての感想をラーゲルレーヴは送っている。『言葉と絵』誌上におけるエレン・ケイの読本批判に対しても、ラーゲルレーヴは手紙を書いている。「古い読本への批判をありがとう」「あの読本は退屈という星の下に生まれたにちがいありません」と、痛烈な読本批判に賛同している。ただしそこには読本が「どんな権力も倒すことができない国家機関、国会での賛成無しには廃止できない憲法」のような不可侵なものなのではないか、という諦観もみとれる。この時点での読本に対するラーゲルレーヴの見方は第三者的であるといえよう。なお書簡類の文面から、ケイの教育思想家、評論家としての言動にラーゲルレーヴは賛同意を示していたものの、彼女の性格や著述家としての才能、政治的言動については必ずしも評価していなかったことがうかがえる。

『児童の世紀』の第2章「未来の学校」で「地理学、植物学、動物学の知識は分割されず、一つに総合されなければならない」と記しているのをはじめ、ケイの読本についての見解には、『ニルス』を想起させる箇所が少なくない。管見の限り『言葉と絵』の論考に対する書簡以外には、エレン・ケイによる国民学校読本に対する批判や新しい本への提案に対するラーゲルレーヴの反応は見あたらないけれども、『ニルス』を構想するラーゲルレーヴの意識下にケイの存在があったことは間違いないだろう。

II-4 読本改善運動の高まり

1890年代には教科書改訂が進められ⁷⁾、読本も再度改訂された。しかし読本への批判が止むことはなかった。やがて国民学校における教育の内容や方法を子どもの実態に即したものに改善しようという動きは教育現場からもおこった。

1901年4月発行のスウェーデン教員新聞17号には、各地で高まった読本改善運動の動きが報告されている。ハーネーサンド支部では「国民学校の読本は内容および形式が要求を満たしているか。我々には国民学校の子供たちのために読本を正す権利がある」と題して議論が交わされ、次のように報告している。

国民学校の読本は、国民学校の児童のための読本に課せられるべき要求を満たしているとはいえないため、本会合は、読本を内容・形式共に子供たちがより楽しめるものにするための改訂の必要を宣言する。写実的な描写を欠き、生活が感じられず、本来子供のための読本が何よりも必要とす

る、子供自身の思考世界との関連性がない。（中略）我々の古い詩、民話、民謡が選ばれるべきであり、内容や形式は子供たちに合わせたものとする。読本では、現代の作家たちが我々の子供たちに語る場も与えられるべきである。

具体的に執筆者の候補として複数の作家名をあげており、そこにはラーゲレーヴの名もみえる。さらに以下のように読本改訂を強く要求している。

国民学校の読本は、国民学校の児童のための読本に課せられるべき要求を満たしているとは言い難いため、本会合は、読本を内容・形式ともに子供たちがより楽しめるものにするための改訂の必要を宣言する。

またファールン支部による次の要望も掲載されている。

支部は、あらゆる点において子供たちの様々な段階に沿う、より良い、より適した読本が国民学校ですぐに使えるようになることを希望する。それと同時に、スウェーデン国民学校教員協会の中央理事会に、直ちにそのような読本のための資料収集にとりかかることを要求する。

以上のように、読本の内容と形式に対する批判はあるけれども、内容に関しては、民話や民謡などの伝統的なもの、子どもたちの興味関心を喚起するものという抽象的なものにとどまり、取り扱う内容、対象についての具体的な提言はない。

それでも、こうした教育現場の内外における読本批判の高まりを受けて、国民学校教員協会理事会は読本作成に向けて動き出した。

Ⅲ 新読本の企画

1901年、読本批判や改革運動の高まりを受け、国民学校教員協会の中央理事会は読本作成委員会を立ち上げた。委員会のメンバーには、教員出身で当時国会議員でもあったペルイ、国民学校教頭アルフレッド・ダリーン（Alfred Dalin）ら⁸⁾が任ぜられ、この読本作成委員会で具体的な企画がなされることになった。

Ⅲ-1 ラーゲルレーヴによる読本構想

1901年秋、ラーゲルレーヴに読本作成への協力の打診がなされた。ラーゲルレーヴはすでに作家として名をなし、大作『イエルサレム』の執筆に取り組んでいる最中であった。打診はダリーンからラーゲルレーヴの知人で師範学校教授のヴァルボリイ・オランダ（Valborg Olander）を介してなされた。ダリーンがラーゲルレーヴを候補にあげた理由として、彼女がネースの手工講習所で受講生に対して行った講義のこと、彼女の著作『エジプト脱出』などをあげていると、ラーゲルレーヴは友人への手紙に記している（Elenius 2005）。

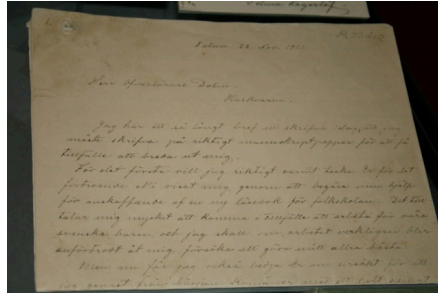


図2 ラーゲルレーヴがダリーンに出した最初の手紙
(1901年11月22日付 スウェーデン王立図書館2008年8月撮影)

ダリーンが示した委員会による提案は、1. 短い話、民話、伝説、2. 定型叙事詩とそれよりは少ない叙情詩、3. いくらか長めの話や民話、歴史的な内容を含む最近の北欧のもの、4. 湖、川、森、畑、牧草地の描写、という大まかなものであった。形式も物語ではなく、様々な話の集合体という点では従来の読本と変わらない。

打診を受け、ラーゲルレーヴはダリーンに宛てて長い手紙 (Toijer 1969) を書き、自分自身の考えを示した (図2)。冒頭で「スウェーデンの子どもたちのために働く機会を与えられることは大変嬉しい」と記しながらも、「先生がお考えのものとは全く別の提案から始める失礼をお許しください。何か新しいものを創り出すのは私たち作家ではありませんか。そのために私たちはいるのです」として、「数日前に浮かんだ考え」を書き記している。まず古い作品を集めて編集されたこれまでの読本を「全く困ったもの」で「何かを知り得たというような満足や楽しい印象を得られるような明確な知識は子どもたちに与えないもの」だと記すくだりは、エレン・ケイの読本批判を彷彿とさせる。しかし、続く次の文面にこそラーゲルレーヴの読本への思いが言い尽くされているといえよう。

私は、子どもが新鮮でいきいきとした知識に触れ、知る必要がある第一のものは何か、と問いかけてみました。そして、子どもたちが十分に知るべき最初のものは、自分たちの国である、というのがその答えでした。… (中略) …、今こそ、地図に命を吹き込み、子どもたちの想像力のために、森や湖、畑は牧草地、村、城、農場、町で地図を満たすのです。ここが出発点であり、しっかりとした土台であると私は言いたいのです。

さらに、内容についても具体的に記している。

私は、地方ごとにラブランドの人々からスコーネの人々まで国全体の描写をしたいと考えています。動物や植物も取りあげますが、その地方でもっとも典型的だと思われるものにします。9歳の子どものわかるように、鉱山、森、漁業、狩猟、木材運搬、農場、もちろん工場、都市、これらすべてにおける生活は取りあげるべきでしょう。すべての都市を取りあげることはできませんから、幾つかの典型的なものを選びます。… (中略) …

これでは、まるで描写だけで成り立つ本になるように聞こえます。しかしそれは全くもって私の意図するところではありません。私はそれが本物の面白くて楽しい読み物になるようにし

たいのです。つまり、私は地方ごとの小さなお話を通して国全体を描けるようにしたいのです。多くの場所からの伝説や民謡から、漁師や船長から、歴史や自然科学から、詩人や小説家から、あらゆる小さな話をたよりにしたいと考えています。しかし、どれも特定の地方、特定の場所に関係しており、事実を含んでいなければなりません。全てのお話は、一つの大きな話へと導くためにあるのでなければなりません。話がフィクションになっても、地方の描写は本物でなくてはなりません。…（中略）…

私はただ、しっかりとした出発点をもちたいだけなのです。それは子どもたちに自分の国を知ってもらうということなのです。先生が読本の出発点となるべきだとおっしゃっている祖国への愛と関心、自分の国についての親しみと美しいイメージを子どもたちに与えるということです。（下線筆者）

このあと、執筆を引き受ける際の条件もあげている。何名かによる共同執筆を考えていたグリーンに対して「話の構成、計画、テーマ、つまりほとんどの作業全体を私一人に任せていただきたい」と要望し、共同執筆を断固拒否している。「私は自分のあらゆる創作力と知識を必要とし、それはこれまでにない厳しい試練となるでしょう。私はこの本を自分の最高の作品の一つにしたいのです」と並々ならぬ決意を示しているのである。

この手紙を書いた時点では、ラーゲルレーヴの念頭には少年ニルスもなければ、空を飛んで旅する構想もまだ何もなかった。しかし、『ニルス』の骨格、すなわち地理読本としての本質はこの手紙で言い尽くされているといっても過言ではないだろう。「子どもたちが十分に知るべき最初のものは、自分たちの国である」とまず力強く言いきり、具体的には「地方ごとの小さなお話を通して国全体」「ラップランドの人々からスコーネの人々まで全てのそこに暮らす人々」を描くことをあげ、従来の地理学習に登場しない人々の暮らしを描いた新たな読本の重要性を強調している。たとえ「地元に伝わる」「小さなお話」の助けを借りるとしても、全てが「特定の地方、特定の場所に関係しており、事実を含んでいる」ことが重要であると、物語形式を取りながらも、中身は実在の場所の事実に基づくものとする点で、いわゆる童話とは明確に区別している。

Ⅲ-2 読本作成委員会とラーゲルレーヴとの契約

ラーゲルレーヴは委員会からの要請をそのまま受け入れたわけではなかった。そもそも委員会は複数の作家による共同執筆を考えていたけれども、彼女はそれをきっぱり拒絶し、国民学校読本の一大プロジェクト計画を提案している。打診に対する返答の最初の手紙で国民学校全学年の読本構想を示し、自らは一年生用の読本を一人で執筆することを条件にあげた⁹⁾。委員会はこの条件を受入れ、1902年1月にはグリーンがラーゲルレーヴを訪ね、読本作成に関する覚書が委員会とラーゲルレーヴとの間で取り交わされた。内容は以下の通りである。

この覚書は1902年1月8日～9日にわたる作家の Selma Lagerlöf と教頭 Alfred Dalin による、国民学校1年生用の読本の作成についての会合で作成された：

1. 本は著者が1901年11月22日に Alfred Dalin に送った計画によって進める。記述はできればスウェーデンの北部から始める。
2. スウェーデン国民学校教員の中央理事会から任命された読本作成委員会は教頭 A.Dalin, 国会

議員、国民学校教員 F.Berg と教頭 J.Franzén が構成員であり、この3人が本の発行者となる。

3. 発行者は資料を集めて著者に提供すること。これらの資料は、海外の文献、スウェーデンの物語のリスト、古い神話や歌、まだ記録されていない出来事、人や生業の詳細な説明などの話は国内各地域から集めること。
4. 著者は年末に作業を始められるように、資料は今年9月まで著者に提出すること。
5. 著者はまずいくつかのサンプルを作成し、発行者が適正を判断する。
6. 原稿が出来上がったら発行者が前述した目的で確認する。
7. 校正刷りは発行者による確認および校正され、著者の最終確認を行った上で印刷される。
8. 本文1800字の約200ページと50の挿絵で構成する。
9. 挿絵のモチーフは著者や発行者が提案する。(10～15略)(スウェーデン王立図書館所蔵原本から)

ここで正式にラーゲルレーヴが著者、読本作成委員会のメンバーが発行者となること、委員会とラーゲルレーヴとの協体制の原則が決められた。

Ⅲ-3 地理読本としての性格とラーゲルレーヴの企図

1900年前後のスウェーデンとその周辺は、あらゆる面で近代化が進む一方で、政治的には不安定な状況にあった。隣国フィンランドはロシアの脅威にさらされ、スウェーデンと連合関係にあったノルウェーはその解消の動きをみせていた。当のスウェーデンは、農業社会から工業社会への転換期、近代化の只中にあった。人口増加とともに人口流動が始まり、地方の疲弊、農業の衰退、外国への人口流出が問題となっていた。都市部や国外への人口流出に歯止めをかけ、地方や農業を維持しながら未開の北部開発を進めていくことが、近代国家形成期にあるスウェーデン国家の緊要の課題であった。そのためには、荒涼とした国土のイメージを払拭し、北部を含めスウェーデンの国土が希望と可能性に満ちたものであるという新たな国土観を有するスウェーデン国民を育成することが求められた。新しい読本に課せられたのは、国土理解を通して子どもたちにスウェーデンの新しい国土像をもたせ、郷土を愛するよき市民、国土を愛するよき国民としての自覚と誇りを育てることだった。

ラーゲルレーヴは、こうした社会の要請を理解し、読本作成委員会の計画を受入れつつも、そこに彼女自身の思いを織り込んでいこうとした。新浪漫主義の国民的女流作家だけがラーゲルレーヴの顔ではなかった。上流階級と民衆との子弟の教育が分離した複線型学校制度から単線型学校制度に改め、「スウェーデンの子どもの教育を民主化する」という国民学校教員協会の政治的計画は、ラーゲルレーヴの思いとも合致した。第1巻完成後の祝賀会で、「執筆の際念頭においたのは、民衆の子どもたちであり、自分の本を通して冒険に知識を挟みこみ、国民学校に喜びを広げることができれば」と語った(Svensk läraretidning 1906)。こうして、読本の話があるまではおそらく考えもしなかったであろう壮大な企てをラーゲルレーヴは抱いたのである。すなわち、それまでの作品とは読者層も形式も異なるこの読本で「子どもたちが本のタイトル、著者などみなくても、私の考えをとりこむこと」になり、「自分の教育的理想を実現し、スウェーデンについての自分の考えを伝え、人々の生涯にわたる思考に影響を与えること、スウェーデンの民主化に国民教育を通して参加できるという可能性」(Nordlund 2005)に魅せられたのである。

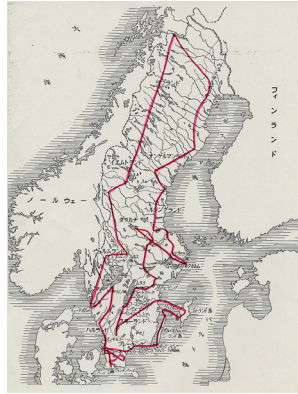


図3 『ニルスの不思議な旅』のルート（矢崎源九郎 1954）＊旅のルートに朱で加筆

Ⅳ 『ニルスの不思議な旅』の制作過程

『ニルスの不思議な旅』は55章からなる（表2）。スウェーデンのスコネ地方にある小さな村に住む少年ニルスは、ガチョウの群れとともに北のラブランドを目指して北上し、そこで夏を過ごし、秋には南へ下り、故郷に帰ってくる（図3）。章題目には全地方名が含まれており、物語のなかでは各地方を空から概観した上で、それぞれの地域に特徴的な自然や産業、人々の暮らしを描いている。

『ニルス』の中表紙には、著者ラーゲルレーヴのほか2名の名前が記されている。国民学校教員協会の読本委員会メンバーのグリーンとベルイである。読本の執筆はラーゲルレーヴ個人によるものであるが、その制作過程、とりわけ執筆前の資料収集には読本委員会や協会の会員が大いに関わっている。スウェーデン地誌読本ともいえる『ニルス』を作家ラーゲルレーヴが一人で執筆するには、大量の地理情報を収集しそれを再構成する作業が必要であった。国民学校教員協会はその情報収集に大きな役割を果たしたのである。

Ⅳ-1 情報の収集

1902年7月、読本作成委員会はラーゲルレーヴからの要請に基づき、「新しいよい本 国民学校の1年、2年用に」と題して、読本作成委員会の3名の名前で下記のような地域情報の提供を、国民学校教員協会の会員である各地の教員らに依頼した。

スウェーデン国民学校教員協会の中央理事会は3名のメンバーに、国民学校低学年の読書教育に使うための本を出版するように指示した。この本の中では、我が国の自然、動物の世界と人々の生活の具体例を取り上げることとする。目的の一つはこれらの話をできる限りありのまま表現することであり、そのために、一部新しい材料が必要である。しかし、これらは文献から得られなくて現地から得るしかない。この作業には全教員が参加できる。本の出版の作業を軽減させ、出版の時期を早めることにもつながる。参加希望者は詳しい知識をもつ分野を選び、それについての詳細な報告をしてほしい。たとえば自分で経験したことや見たことや、聞いたことなど。現

在实际にみられることはとくに重要である。判断や解釈は必要ない。なぜなら、集めた資料は全て作家のセルマ・ラーゲルレーヴの手によって完成させられる予定である。すでに出版されている資料を利用した場合、タイトル、出版年、出版地、ページを明確にする。新聞や臨時の出版物に掲載されている情報などは現物を送付するか、記事の題名、出版物のタイトル、出版年、出版地、などを知らせてほしい。各自は最も高い関心のある分野を選び、そしてその地域の特徴であると思われることを提供してほしい。（スウェーデン王立図書館所蔵原本資料より）

この依頼文に加えて、会員に地域情報の提供を求め、以下の具体的な項目 20 例が掲げられている。

- 1) 人跡未踏な地での旅の経験談：夏と冬
- 2) 新しい建築物について
- 3) 道路のつくり
- 4) 穀物栽培：海岸地方，より北の環境が厳しいところ
- 5) 漁業：海岸地方，河川
- 6) サメ（原住民）と開拓者との共存
- 7) 牧草地での干し草集め
- 8) 冬の雪
- 9) 辺鄙な地域の大きめの村（教区程度）の生活について：冬，夏
- 10) 北部におけるクリスマス時期の一日
- 11) 森林，河川，山間からの物語と神話
- 12) 人物についての話，その地域の生活や気質を良く表しているような人物の紹介
- 13) その地域ならではの不思議なできごと
- 14) 林業に関わる人の一日：a) 伐採のとき b) 伐採した丸太を運ぶとき c) 丸太を川で運ぶとき d) 製材所で e) 木材の積み上げ
- 15) 登山
- 16) 高原（山）での吹雪
- 17) 高原の牧草地の一日（夏）
- 18) 狩：a) 鳥の狩（鉄砲で） b) アザラシの狩（鉄砲で）
- 19) クマや狼との戦い
- 20) 鉱業の村の生まれ

情報収集が北部を中心になされていたのは、「覚書」どおり当初物語は北から始まることになっていたためと推測される。

この依頼に対してどのような報告がなされたかは未調査であるが、ラーゲルレーヴはこの地域情報の提供に期待をしており、『ニルス』の内容に反映されたことは疑いない。それまでに文書化されていない伝承、民話、実話が掘り起こされ、収集された情報は『ニルス』のなかに違和感なく組み込まれている。たとえば、スモーランド地方の貧しい農家で子どもや孫らがアメリカに移住したまま帰ってこず、残された老婦人が一人息を引き取る話（17章「農家のおばあさん」）、ダーラナ地方の老婦人によるストックホルムに出稼ぎに出た若い頃から結婚後の今日までの暮らしについての語り（31章「ヴァールボリイ祭りの夜」）などは、年代や地名、家族の記述が具体的であり、12)の項目に対する実話の情報提供に基づくものであろう。また、ニルスの活躍が描かれる話の舞台となるトーケルン湖干拓計画（19章「大きな鳥の湖の物語」）も、コールモルデンの森が蛾の幼虫の大発生により壊滅の危機に瀕した事件（22章「カルルと灰毛の話」）も、いずれも実際にそれぞれの地域でおこったことであり、これらも13)の項目に対する情報を基礎にしている可能性が高い。

IV-2 資料としての『スウェーデン観光協会年報』

1902年の11月には、各地の地誌、動植物、伝説、民話、民謡などに関する膨大な書籍のリストが読本作成委員会からラーゲルレーヴのもとに送られた。

ラーゲルレーヴがもっとも活用したと思われる文献の一つが、1884年に設立されたスウェーデン観光協会 Svenska Turistföreningens 発行の『スウェーデン観光協会年報（Svenska Turistföreningens Årsskrift）』（以下『年報』と略す）である。同協会の設立目的は、北部での鉄道敷設により国内外の人々にとって身近になった広大で自然景観豊かな地域の情報を提供し、多

くの人々が観光旅行をすることを可能にし、それを推進するための諸活動を行うことであった。1890年『年報』創刊号によれば、「自分の国を知ろう」をスローガンに新聞等で協会創設を告知し、この呼びかけに対して集まった研究者、学生が中心になって、12月ウプサラで協会は設立された。

『年報』は、各分野の第一人者の研究者や文筆家が執筆にあたり、国内各地についての紀行文や人々のくらしや自然などについての文章、そして多数の写真が掲載された。一冊450頁前後で、20枚前後の口絵のあとに20前後の紀行文が掲載され、本文中にも多数の写真が挿入された豪華なつくりの本であった。

「自分たちの国を知ろう」というスローガンは、「子どもたちが知るべき最初のものは自分たちの国である」としたラーゲルレーヴの思いにも通じる。それは協会のよびかけであるとともに、それまで未知であった、あるいは関心の外にあったスウェーデンという国を意識し、スウェーデン国民であることを自覚し始めた人々の声でもあったのではないか。自分の生活圏を超えた非日常に目が向きはじめた階層の興味・関心とも合致し、『年報』は、北部の観光旅行のためというよりも教養書として多数の読者を得たとみられる。

読本作成委員会があげるまでもなく、ラーゲルレーヴは以前から『年報』を手にしてきた。『年報』に掲載された紀行文を例に構想を述べてもいる。この『年報』と『ニルス』との記述の詳細な比較分析を行った Erlandson (2006) は、『ニルス』のなかの景観描写で『年報』の記述にラーゲルレーヴがインスピレーションを受けた可能性が高い箇所を多数指摘している。

IV-3 資料としての写真と地図

『ニルス』における地域の景観描写は、幾つかのパターンに分類することができる。

第一に、地図の読図による描写があげられる。『ニルス』は各地方についてくまなく取りあげており、それぞれの地方を鳥瞰するような描写がでてくる。たとえば、ヴェストマンランド地方の描写は以下の通りである。こうした記述はおそらく地方図(図4)などの読図によるものと推測される。

「この土地の東部は平らだと知ったが、平野を北から南に走っているみぞや筋が、なんだか理解できなかつた。このすじはすべておなじ間隔をおいて、ほとんどまっすぐに走っているので、ずいぶん奇妙に見える。「この縞になった土地はまるでお母さんの上っ張りみたいだなあ、あそこをとおっている、あの縞はなんだろうね。」とニルスはいった。「川と尾根、道路と鉄道、川と尾根、道路と鉄道だよ。」とガンたちが答えた。(27章「ベリースラーゲルナで」香川1982)

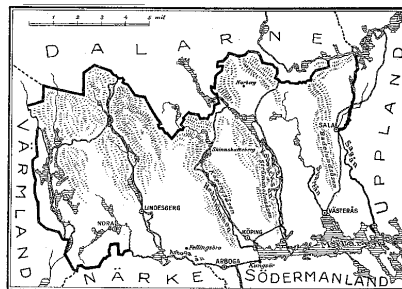


図4 ヴェストマンランド地方図 (Olander, V. (1918) p.196)

表3 『ニルスの不思議な旅』初版本（1906・1907）に搭載された図版の内訳（筆者作成）

		1巻(1906)	2巻(1907)	合計(枚)
図 版 の 主 た る 題 材	都市景観	2	4	6
	村落景観	0	4	4
	人間の活動	0	6	6
	教会	0	2	2
	城・宮殿	3	6	9
	建物・遺跡	3	1	4
	家屋・建物	3	3	6
	自然景観	1	2	3
	山	0	1	1
	湖	1	2	3
	川	1	3	4
	滝	2	2	4
	海岸	3	1	4
	欽山	0	4	4
動物	3	3	6	
種 類	ニルス	1	0	1
	その他	1	3	4
種 類	イラスト	4	12	16
	写真	20	35	55
図版総数		24	47	71
総頁数		237	486	723

「地図に命を吹き込み、子どもたちの想像力のために、森や湖、畑や牧草地、村、城、農場、すべてのあらゆる町で地図を満たす」というラーゲルレーヴの思いが、こうした記述に込められているといえるだろう。

ちなみに『ニルス』の旅はスコーネ地方西ヴェンヘーイ村にあるニルスの家から始まり、スウェーデン最南端のスミーエ岬で終わる。西ヴェンメンヘーイ村はスミーエ岬に一番近い集落、つまりスウェーデン最南端の村である。こうした設定も地図を眺めていて閃いたのかもしれない。

景観描写の手がかりとした資料の第二は写真である。地図によるとと思われるものよりも視点がずっと低く、丘や山から眺めたような記述となる。

『年報』には多数の写真が掲載されている。たとえば、1899年の『年報』は26の口絵写真に加えて、20の紀行文等が載せられた443頁にわたる本文中にも144枚の写真が挿入されている。本文ばかりでなく掲載された写真は、地域をイメージし想像力を膨らませて物語を生み出す助け、さらには各地の景観描写の具体的な手がかりになっていると推測される¹⁰⁾。

ところで、『ニルス』初版本には71枚の図版が掲載されている。僅かな挿絵のみの従来の読本との大きな違いである。このうち16枚が挿絵、55枚が写真である（表3）。なお同時期に発行された地理教科書（Bergström 1907）にも、それまでにはなかった写真が挿絵に混じって本文中に割り付けられている。それに対し『ニルス』では、1図版1ページ上質紙で本文ページの間に差し挟まれている（図5）。その大半は撮影者名入りで、なかには『年報』からの転載もある。たとえば図5の岩石海岸の写真は1905年版68頁に全く同じものが掲載されている。

第1巻と第2巻とで、図版の傾向に違いがみられる。第1巻では1枚しかなかった人物が写っている写真は、第2巻では8枚に増え、また鳥瞰の写真は3枚から15枚に増えている。計画段階の「覚書」には「挿絵50枚」とあったが、挿絵は撮影が困難な動物や伝説などに限られる。なお主人公ニルスが登場するのは、第1巻第1章に挿入された最初の図版（図6）1枚のみである。



a. グリミングゲ城 (1巻 p.67)



b. リラ・カルソー海岸 (1巻 p.145)



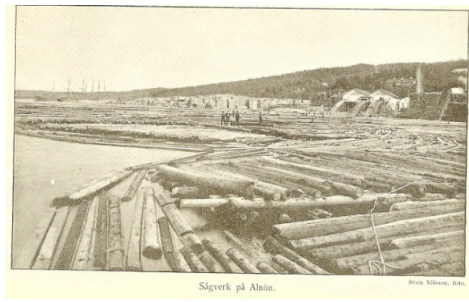
c. グルーヴの採石場 (2巻 p.97)



d. レクサンドの教会 (2巻 p.162)



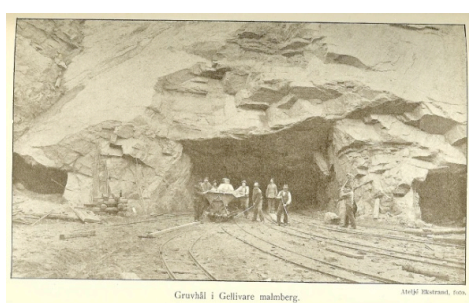
e. サンドビッケンの工場 (2巻 p.263)



f. アルノンの製材所 (2巻 p.295)



G. オンゲルマンランドの鉄橋 (2巻 p.301)



h. イエリヴァレ鉱山の坑道口 (2巻 p.341)

図5 『ニルスの不思議な旅』初版本(1906・1907)に掲載された写真から

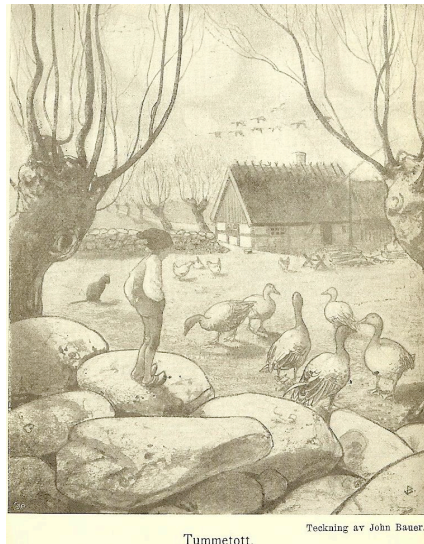


図6 『ニルスの不思議な旅』初版本（1906）でニルスが描かれた唯一の挿絵（第1巻 p.16）

Ⅳ-4 現地調査

景観や地域の描写は上空からのものばかりではない。大地に降りたニルスや人間の目線からのものも多数ある。その大部分は、ラーゲルレーヴの故郷や居住地のほか、訪れたり滞在したりしたことのある場所を描いたものである。執筆当時住んでいたファールンや学生時代を過ごしたストックホルム、毎年滞在していたネースなどの描写は、詳細で臨場感あふれるものである。とりわけ故郷モールバックの描写は情感にあふれ、「子どもたちが学校で読むのによいスウェーデンについての本を書こう」と思っている女性として自分自身を物語に登場させニルスと対面させるなど、『ニルス』のなかでは異彩を放つ章である（49章「小さな屋敷」）。

『ニルス』以前の作品においても執筆にあたっては徹底した現地調査を行ってきたラーゲルレーヴは、『ニルス』を創作するため1903年に南部、1904年夏は北部に出向いている。とくに北部の調査旅行は6週間にも及んだ。ファールンから北に列車で向かい、ウメオからさらにキルナを経てノルウェーのナルビクまで足を伸ばしている。帰路アビスコに3日間滞在し、原野の自然に触れラップ人にも接している。ここでの体験がもっとも興味深いと手紙に記している（Elenius 2005）。

このアビスコにあるスウェーデン第一の山ケブネカイセを目指して、ニルスはガンの群れとともに北へ旅し、夏をこの地で過ごす。『ニルス』には日記のように日付が入り、その描写は季節感が溢れている。北極圏の夏は経験せずして描くことはむずかしかつたに違いない。大地の状態や植物のようすなどは、実際に見聞きしたからこそ描けた描写であろう。またマルムベリットやイエリヴァレでは、鉱山主による案内を受けている。同地区の描写は、この見聞によるものとみられる。たとえば次のように記している。

夏至のころだというのに、まだ雪がいくすじが残っていた。イエリヴァレにある家はほとんどの家も、新しくよく、きちんとできていた。こどもたちは、この山に雪が残っていることと、シラ

カバの葉がまだひらいていないことに気づかなかつたら、この村がラブランドの奥にある村だとは、わからなかったであろう。(中略) 今ではきちんとした家がたつてはいるが、それでも村全体がおかしなふうに見える。明るい美しい家が並んでいるけれども、そのまんまに木の根っこや石ころがそのままになっている森のあとの土地がある。(中略) 鉄道も電灯も、大きな機械もあり、それから電車に乗って小さな電球のついたトンネルをとおって、山の奥まで行くこともできる。どこへいってもすばらしく大きな仕組みが動いている。駅からは鉱石を積んだ列車がつぎからつぎへと出発している(香川訳 1982)。

ラーゲルレーヴは、こうしてグリーンを通して読本委員会と連携しながらさまざまな情報を収集し、そのうえで作家としての創作に入った。

読本委員会が提案した物語の設定は北から始まるものであったが、ラーゲルレーヴはそれを180度転換し、南から北に向かうストーリーに変えた。南部に人口が片寄り、彼らが抱く何もない荒涼とした北部というイメージを可能性のある希望の大地に徐々に転換するためには、そのほうが自然であった。

スウェーデン全土をめぐるのに“鳥の背に乗る”という物語の設定は、春にいなくなったガチョウが秋に家族を連れて戻ってきたという昔聞いた話にインスピレーションを得たともいわれる。鳥の目線で地域を描くという手法は、地図を眺めていて思いついたのかもしれない。南から北に向かい南に戻るのには渡り鳥のルートにも合い、ここに南の村からガチョウの背に乗ってガンの群れとともに春から秋にかけて旅をするというストーリーの骨格ができあがったのである。

地図や写真はニルスが見た上空からの眺めとなり、文献で得た動植物に関する知識は、物語に様々な野生動物を登場させ、景観描写に地域の樹木や草花を加えた。教員らから集めた各地の実在人物のライフヒストリーは老女や農夫による“語り”となり、自らの経験や現地調査で見聞きしたことは幼い少女の体験やニルスの見聞として再現された。「話がフィクションになっても、描写は本物でなくてはならない」という主張どおり、出所の異なる一つ一つの事実は彼女の創造力によってフィクションに変異し、オリジナルの物語に仕上がった。

V むすび

1906年12月『ニルスの不思議な旅』第1巻発行を祝してファールンで祝賀会が開かれた。このときのことをスウェーデン教員新聞は「集まった教員たちは芸術的な描写の下に隠された多くの知識をはっきりと理解し、本の助けを借りて自分の教育に生き生きとした輝きを与えようと意欲に燃え」、「すでに国民学校でいくつかの章を試していた教員は古い世代とはまったく違った国土像を子どもたちに与えるだろうと予見した」(Svensk läraretidning 1906)と記している(図7)。

聴衆の前に『ニルス』の一節をラーゲルレーヴが朗読したあとグリーンは、読本が「これから何世代ものスウェーデン人に読まれることになる話」であり、この日が「歴史的に意義ある日」になると語っている。当初は保守的な教育者による批判こそあったものの¹¹⁾、グリーンの予想どおり時代を超えて読まれることになるばかりか、予想を超えて国外でも大きな反響を呼んだのである。

以上みてきたように、『ニルス』の誕生は、当時の読本に対して批判的な国民学校教員協会と依



図7 『ニルスの不思議な旅』の完成を報じるスウェーデン教員新聞
(1906年12月5日第49号1面)

頼されたラーゲルレーヴとによる新地理読本作成の一大プロジェクトの賜物であった。新読本『ニルス』はさまざまな手段を駆使して集められた地理情報をもとに作られた“一大スウェーデン地誌”という性格ももっていた。読本作成委員会からの打診へのラーゲルレーヴの返答の手紙にある「地方ごとの小さな話を通して国全体を描く」、「話がフィクションになっても、描写は本物でなくてはならない」、「どれも特定の地方、特定の場所に関係しており、事実を含んでいなければならない」といった文言は、今日の地誌教育に対しても示唆に富むものである。

それでは「子どもたちが知るべき最初のものは、自分たちの国である」と記したラーゲルレーヴの真意はどこにあったのだろうか。“知るべき”は“自分たちの国”を構成する大地のありよう、そして、それぞれの土地で生きる人々の誠実でひたむきな生きざまであったのではないか。『ニルス』はそれらの様々な大地からなる国土、それらを郷土とする人々の集まりである国民、それぞれへの讃歌であった。

ラーゲルレーヴは新たな産業の発展や地域開発によって自然や各地の地域性、伝統文化が損なわれることに危機感を抱いた。近代国家が求める新しい国土像の形成という要請を、ラーゲルレーヴは“地域の個性の尊重と地方の多様性の受容”そして“自然と人間との共生”という普遍的なテーマにおきかえた。それらを根幹において、事実を描写しつつ、子どもたちの想像力を高めるフィクションでくみ、物語としてつないだ。事実と科学とに裏付けられて丁寧に描かれた物語は、結果として国土と郷土に対する認識を高め、それらに対する誇りや愛情を抱かせる啓蒙書となった¹²⁾。さらに旅という時間のなかでニルスが成長していくように、子どもたちの心の成長をも促すことに成功している。主人公ニルスは各地での様々な体験のなかで“自分はどこでどう生きていくのか”と何度も自分に問いかける。その問いは読者である子どもらの心にも、読み進むにつれてやがて湧いてくることになるであろう。“自分はどこでどう生きていくのか”，時代や国を超えて地理教育の基底にあるのはこの問いかけかもしれない。

付記 本稿は、平成18・19・20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号18520601「スウェー

デン地誌教育にみる地理思想－「ニルスの不思議な旅」をテキストとして」に関わる研究成果の一部である。スウェーデン王立図書館所蔵ラーゲルレーヴ関連貴重資料の閲覧にあたっては、同館 Ann-Charlotte Knochenhauer 司書に大変お世話になった。記して感謝申し上げる。

注

- 1) 読本 (läsebok) は「読方」に使われる広義の教科書であるが、地理や歴史などの教科書 lärobok と区別される。本稿では地理の教科書と区別するために『ニルス』を読本、地理読本と定義する。『ニルス』は国民学校1年用、すなわち9,10歳向け読本。
- 2) 日本では香川鐵蔵が1918年『飛行一寸法師』の表題で(大日本図書株式会社)から第1巻の翻訳を出し、1934年には自費出版で『不思議な旅』を出している。戦後は山室静(香川と共著、1949年、学陽書房)、矢崎源九郎(1953.4年、岩波少年文庫)他による邦訳も出され、大手出版各社による世界児童文学の全集ものにたびたび収録された。ただしいずれも完訳ではない。そのほか抄訳、絵本、紙芝居、再話などさまざまな形で児童文学作品として広まっていった。
その後1980年にNHKでテレビアニメ「ニルスのふしぎな旅」(学研)が1年間にわたって放映され、人気を博した。原作に基づきながらも、地理的な内容は大幅にカットされ、少年ニルスと動物たちとの冒険と成長に重点がおかれ、一部創作も入っている。
日本における最初の完訳は、1981、82年に講談社から出された香川鐵蔵・節訳『ニルスのふしぎな旅』全4巻である。2008年には菱木晃子による訳(福音館書店)が出た。
- 3) 初出は1884年に書いた初めての教育学論文であり、1900年『児童の世紀』に収載された。小野寺は「教科書」と訳しているが、言及されているのは、読本 läsebok であり、一般教科の教科書 lärobok が対象ではないとみられる。
- 4) エレン・ケイは論文「本と教科書」を発表した数年後に一つの参考読本を著した。彼女が教壇に立っていた学校の校長アンナ・ウイットロックは「われわれは“面白い教科書”を導入した。そのなかにはロビンソン・クルーソーおよび当時学校では面白い読み物を使ってはならなかったので特殊視されていたものも入っていた」(小野寺1982)。なお、のちに『児童の世紀』の第2版(1913)を出した際、その6章「本と教科書」に「最近あらわれた『ニルスの旅』とヘイデンスタム(Geijerstam)の『スウェーデン人とその首領』(1912)を学校で用いるべき本として注に加えている。
- 5) 「人と作品」p.172～173, エリー・プーナル、『ノーベル賞文学全集18』1971, 主婦の友社。
- 6) 1907年には Upsala 大学の名誉博士号を女性として初めて授与され、1909年にはスウェーデン人として、また女性として初めてノーベル文学賞を受賞し、1914年にはスウェーデン・アカデミーの会員に選出された。ラーゲルレーヴは国民作家であるとともに女性の社会進出の草分け的存在でもあった。
- 7) ベルイは自ら地理教科書(Lärobok I Geografi for Folksskolan, 1897)を発行している。序文で、従来の教科書の違いとして、系統的記述から地方別地誌に変えたこと、地図や挿絵を多くしたこと、古くなる統計は本文中には極力入れず付録をつけることなどを記している。スウェーデンについては地方別に記載し、ついで北欧諸国、ヨーロッパ主要国、その他の世界については、州を幾つかに区分して記述している。スウェーデンは地方別地図だけであるが、他の国や地域については地図に加えて景観、産業やくらし、動物、歴史に関わる多数のイラストを付している。ベルイの教科書では、地方別の地図には平野、丘陵、山地の地形区分、

主要河川，主要交通路が描かれている。本文に出てくる地名に番号が付され，地図にその番号がおとされている。1907年に出された地理教科書（Ola Bergström）では図版が大きなものはページの半分以上を占めるほど大きくなり，地図には主要都市，主要自然地名が入っている。写真も登場し，改善がみられる。

- 8) 2人のほかランドの国民学校教頭（J.Franzé）も当初はメンバーであったが，途中で抜けたとみられ，名前は挙がっていない。
- 9) 手紙のなかで次のように記している。「一年生には私たちの国についての本，二年生にはこの国の歴史についての本，物語で始め歴史というより伝記に近いような，できるだけ人物に関連させるのがいいでしょう。国民学校の残りの二学年では学問的読本とでも呼ぶべきものをもちたせるべきです。（中略）自分がその中で生き，その一員である社会に関する知識を与えてくれる本は，悪いものではないと思うのです。スウェーデンの子どもたちは役に立つものだとわかるものは喜んで読むという強い気持ちをもっていると私は確信しています。」この構想のもと，ダリーンは自ら『スウェーデンの詩』（Dalin 1909）を編纂し，また歴史についての本としてヘイデンスタムによる『スウェーデン人とその指導者たち』（Heidenstam 1909）が生まれることになった。読本作成委員会によるシリーズとして『ニルス』，『スウェーデンの詩』，『スウェーデン人とその首領』の中表紙には，それぞれシリーズⅠ，Ⅱ，Ⅲと記されている。スヴェン・ヘディンの『極地から極地へ』（1911）は，ラーゲルレーヴが3・4年で世界についての本をという提案に基づくといわれる。
- 10) Erlandson（2006）は『スウェーデン観光協会年報』に掲載された写真類が景観描写の補助的資料となった可能性についても言及し，たとえば印象的な冒頭のスコネ地方の田園風景の手がかりとして『年報』1895年の口絵写真をあげている。
- 11) 『ニルス』に対する批評は各種新聞誌上大いに賑わした。国民学校改革派はこれを称賛したが，複線型学校制度維持の保守派は否定的であった。
- 12) のちにつくられた読本使用のためのハンドブック（Olander 1918）には，読本に登場する事物や地名，動植物，等に関する説明を頁ごとに詳細に記すとともに，各章のねらいや扱い方について解説している。そのなかで「章の始まりのどの部分も，知識を与えるものとして読まれる生物や地理の教科書からの一節のように扱わないよう」くりかえし述べている。事実に基づく実際の場所も出来事も「物語の冒険にとってのすばらしい舞台」とだけ見なすように，それでも「分かりやすく，魅力ある描写のおかげで，子供たちは知識をおまけのように得る」としている。筆者オランダはラーゲルレーヴの友人で，『ニルス』執筆に際の相談役でもあった。したがって，このことはラーゲルレーヴの考えとも一致するとみなされる。

引用文献

- 小野寺信・百合子訳，Key,E. 1979. 『児童の世紀』（富山房）。
- 小野寺信・百合子訳，Lengborn,T. 1982. 『エレンケイ教育学の研究』（玉川大学出版部）。
- 松崎巖. 1981. 『北欧教育史』世界教育史大系 14（講談社）。
- 香川鐵蔵・節訳，Lagerlöf,S. 1981～1982. 『ニルスのふしぎな旅』1～4（偕成社）。
- 村山朝子. 2005. 『「ニルス」に学ぶ地理教育－環境社会スウェーデンの原点－』（ナカニシヤ出版）。
- 望月一雄他訳. 1971. 『ノーベル賞文学全集 18』（主婦の友社）。
- 矢崎源九郎訳，Lagerlöf,S. 1954. 『ニルスのふしぎな旅』下（岩波書店）。
- スウェーデン王立図書館所蔵ラーゲルレーヴ関連書簡ほか資料類。

- Berg,F. 1897.*Lärobok I Geografi for Folkskolan*, C.E.Fritzes K.Hofbokhandel,Stockholm.
- Bergström.O. 1907 *Lärobok I GEOGRAFI for Folkskolan*, Hugo Gebers Förlag,Stockholm.
- Dalin,A.1909.*SVENSK VERS PSALMER, SÅNGER OCH VISOR*, Albert Bonniers Förlag,Stockholm.
- Elenius,L. 2005. “Selma Lagerlöf och Norrland. Nationella idealbilder i *Nils Holgerssons underbara resa*”,*I Selma Lagerlöf värld*,182-209.
- Erlanson-Hammargren,E. 2006. *Från alpromantik till hembygdsromantik*. Gidluns Förlag,Stockholm.
- Heidenstam,V. 1909.*SVENSKARNA OCH DEARS HÖVDINGAR*, Albert Bonniers Förlag,Stockholm.
- Key,E. 1898. “Patriotism och Läseböcker”, *Ord&bild*,136-144.
- Lagerlöf,S. 1906 · 7. *Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige* .Albert Bonniers Förlag,Stockholm.
- Maule,H. 1926. *Selma Lagerlöf the woman, her work, her message*.Doubleday, Page & Company, New York.
- Nordlund,A. 2005.*Selma Lagerlöfs underbara resa genom den svenska litteraturhistorien 1891-1996*, B. Östlings bokförlag Symposion.Eslöv.
- Olander,V. 1918. *Handbok till Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige*, Albert Bonniers Förlag,Stockholm.
- Svensk läraretidning. 1881(No.0), 1901(No.1008), 1906(No.1301). *Sveriges allmänna folkskolläraryöreing*.
- Svenska Turistföreningens. 1899. *Svenska Turistföreningens Arsskrift*.Wahlström & Widstrand, Stockholm.
- Toijer-Nilsson,Y. 2008. “Resenären Selma Lagerlöf” ,*SelmaLagerlöf1858-2008*,Kungl.Biblioteket,55-69.
- Toijer-Nilsson, Y.,u.av. 1967 · 69. *Selma Lagerlöf Brev1,2*,Gleerups,Lund.
- Upplagan,S. 1876. *Läsebok för Folkskolan*.P.A.Nprstedt & Söner,Stockholm.